
君はス・テ・キ

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はス・テ・キ

【Nコード】

N4365S

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

大好きなアーティストの歌の自分勝手なイメージ短編、第六話。

大体が男と付き合って、
あんまり長続きた事なんてないんだけど、
ようやくここんどこ、今までになく一年付き合いが続いていた男に、
ひよんな事から「可愛くねえ女」と憎々しげに言われたから、
あたしも勢いで「つまんねえ男」って、言い返した。
そしたら、あっけなく交際終了。それまでよ。

本当に男女の仲なんて、あっけないもんだ。
一年も付き合ってたってのに。
それともこんなのは、やっぱり、あたしだけなんだろうか。

自分ではまたか、くらいで慣れていたつもりでも、
きつと思ったより凹んでいたんだろう。

昨夜、仕事帰りに魔がさして手相占いなんてものを、
道端で見てもらった。
そこで言われた言葉。

「あなた、あまり感情を表に出さない人ね。
こう、なんかいつも押し殺しているっていうか、
楽しい時に楽しい！って言ったり、嬉しい時に嬉しい！って言っ
たり、

甘えられないっていうか、我がままを言えないっていうか」
化粧が濃すぎて、きつともっと暗がりで見たらば、
人間には見えないんじゃないかと思うような顔して、

その中年のおばさんの占い師は言った。

それって結局、可愛くないってことじゃないのか。

あたしを振った男と同じことを言ってるよ。

あたしはげっそりして、差し出した手を引っ込めると、
無表情に、お金を払った。

おばさんはきつと、あたしの手相を見たんではなくて、
あたし自身を見て言ったんだろう。

あたし、さよ子は、顔もスタイルも決して悪くは無いけど、
身長が172センチあるのだ。

目鼻立ちがはっきりしているとも、良く言われる。

そして営業という仕事柄、格好はいつもピシッとしたタイトなスカ
ートのスーツ。

行きつけの美容室で似合いますよと言われた髪形は、肩までのボブ。

モデルみたいだと言われるけど、モデルがちやほやされるのは、
ファッションショーの舞台の上でだけだ。

あたしみたいな女がその辺に歩いていたら、

誰だって、あたしを振った男か、

この占いのおばさんのように思うのだ。

可愛くない女。

そんな昨夜の出来事が、
あたしの不機嫌な今日という一日の始まりに、
拍車をかけていたんだろうと思う。

仕事上、スーツを着なければならぬけど、
あたしの身長でパンツスーツだと、
男性ばかりの営業先では受けが悪く、
リース会社に勤めるあたしの、リース案件ゲットの成績に大きく左
右してしまう。
なので仕事には、わざと形のいい足を見せるように短いタイトスカ
ートを履くのが常だ。

でも、いつもなら毎朝の満員電車でも、
他の女性から頭一つ突き出てるような、あたしのミニスカートは、
痴漢は標的にしない。

けれど、今朝だけは違っていた。

お尻を撫でられた。
執拗に、いやらしく。

家を出た時点で、すでにむしゃくしゃしていたあたしは、
自分の中でそのむしゃくしゃが、
沸点近くまでに一気に高まったのを感じた。

こういう時、可愛い女なら、
どういう風にするんだろう。

「キャー、誰か助けてください！」とでも、叫ぶんだろうか。
そして、実際に可愛い女がそう叫んだなら、
きつと誰かが、助けてくれるんだろう。

でも、下手すると側にいる男性よりも背の高いあたしが、
「キャー、助けて」

と叫んだところで、なんだか助けてもらえるような気が全くしない
のは、

あたしの気のせいなんだろうか。

そして、プラスあたし的に残念なことに、

そんな風に叫ぶのを試す気にもなれないのは、

あたしが小学校から高校まで、少林寺拳法を習っていたからだった。

少林寺拳法は、決して攻撃の武術ではなく、

どちらかというと護身をメインにする教えを持つものだけれど、

あたしは黒帯だった。

ラッシュの中、お尻を触る手にあたしは自分の手を伸ばした。

相手の親指一本を、手のひらで包むようにつかんで、

力いっぱいひねる。

すぐ近くから、男のうめき声が出た。

あたしはその声をばつと振り返ると、唸っている男を睨んだ。
目が合う。

思ったよりも若い男だ。

しばらくぎりぎりと、その親指を力いっぱい締め付けてやった。
男の額から脂汗が出てくるのを見て、あたしは手を離してやった。

「つまんねえ男」

あたしは、あたしを振った男に吐いたせりふを、その痴漢やろうにも呟いてやった。

自分でも思う。

本当にあたしは、可愛くない女だ。

あたしは短大を出て、今のリース会社に就職した。
三年目、23歳になる。

駅の改札口を出て、まだくすぶるさっきの痴漢への怒りに、会社への道をまるでやくざのように、あたしが肩で風を切って歩いていると、

「さよ子先輩！」

後ろから、健次郎の声がした。

あたしと同じ年だけど、大学卒なのでまだルーキーだ。
あたしは彼に仕事を教えるべく、ルート営業でのチームを彼と組まされている。

「お早うございます！」

元気良く、声をかけてくる。
度の厚いメガネ。そのせいで表情は読めないけど、

その他の事は全て見れば分かる。

身長172センチ、あたしと同じ。

出身は有名ボンボン私立大学。成績は優秀だったらしいけど、営業成績は比例せず。性格も素直だし、真面目だし、きっと両親もいい人なんだろうと簡単に予測出来るくらい、育ちがいいのがわかるような、いわゆる良い後輩。もとい、可愛い後輩ってところだ。

そんな事を思って、あたしは一人心中で苦笑する。

あたしは自分が可愛い女に当てはまらないどころか、後輩の男を、可愛い後輩と呼んでいるぞ。

なるほど。納得してしまった。

一生どんなに頑張っても、

もともとあたしは、

決して、可愛い女にはなれない種類の女だったのだ。

大体、この身長を考えてみろよ。

自分に問いかけて、

そう悟ると、あたしは何だか一氣に楽になった。

「おっす、健次郎」

そうかそうか、あたしはもともと可愛くなれない女だったのだ。健次郎に挨拶を返しながら、心の中で頷く。

「さよ先輩、頑張ったんですけど、
どうしても、僕300足りません」

健次郎が度の厚いメガネの向こうから、申し訳なさそうに言う。

300とは、300万円の金額のこと。

足りないというのは、今日の夕方締め切りのリース案件の目標額までの不足のこと。

普段は別々に顧客を回っているのだけれど、お互いの合わせた成績が、

会社側に提出する、チームとしての営業成績になる。

「あたしはプラス200あるから、あと100ね」

あたし自身の目標はとくにクリアしてある。

健次郎の成績カバーも、あと100だったら何てことないだろう。

「任せて、今日あんたのところ一緒に回ってあげるから」

あたしが言うのと、健次郎は何度も何度も頭を下げる。

「さすが、さよ先輩。頼りになります」

あたしは可愛くはないけど、頼りになる女。

って、やっぱり「頼りになる」っていう修飾語は、

女っていう言葉には属していない気がするの、あたしだけだろうか。

あたしの勤める会社は、主に事務機器、
コピー機とかパソコンとかを扱う会社に、
リースを提供しているクレジット会社だ。

あと100万円という金額なら、営業先の事務機器の会社に出向い

て、
大きいカラーコピー機のリースを一台でも取れば、
クリア出来る額。
はつきりいつて楽勝だった。

出社した会社から、健次郎と得意先に出向く。
いわゆるルート営業。

受け持ちの会社を、何度も足しげく通う営業で、
新規顧客獲得の営業に比べたら、一見、楽に思えるかもしれないけど、

ルート営業は、顔見知りになった上で、
相手の気を引かなければならないという性質があるので、
テクニク的には、ある意味、新規開拓の営業よりも技がいる。
何故なら、足しげく通っている顔見知りの営業は、
自分たちだけじゃなくて、数社のライバルがいるからだ。

「お早うございます！」
元気良く声をかけて、健次郎担当の事務機器販売の会社の、
営業部のドアを開ける。

広いフロアには、スーツを着た50人位の、
事務機器販売営業の、男たちがいた。

「おー、さよ子ちゃん！」
健次郎が担当になる前は、ここはあたしの担当だった。
あたしの声を聞いて、声を上げる営業マンに、
あたしはとびきりの笑顔を作った。

「どうも、林さん！」

「相変わらず、でかいね。また育ったんじゃない？」

憎まれ口も相変わらずで、あたしはさらっと受け流す。

「林さんが縮んだんじゃない？」

毒舌には毒舌を。そんな事がまかり通るのも、

あたしが身長172センチだからだ。

「はははは、かもな。もうこれからは、縮むばっかだ」

初老近くになる160センチないような小柄な林さんは、面白そうに笑った。

「久しぶりに、さよ子ちゃん見たから、

丁度、今きたやつ上げるよ」

林さんが言う。

しばらくデスクにうつむいて何かを書いていた林さんが、

あたしに手渡した書類は、

200万円代、大型カラーコピー機の、

リース申し込みの問い合わせの書類だった。

ざっと眺めて、申し込みをしたお客さんも問題なく審査が通りそう
だと思うと、

あたしは林さんにつこりと笑って、

「助かったやう。後輩君、目標に足りなくて」

あたしが健次郎を振りかえって言うのと、林さんは手を振って笑った。
「お安い御用だよ」

ふと見ると、広いこの営業部の向こう側に、
ライバルリース会社の営業がいた。

多数の事務機器販売の営業マンに、取り囲まれている。

パステルカラーのスーツ。

フレアのスカート。裾の長さは膝までである。

髪はふわふわシャギーの茶髪。

リース案件の申し込み書類の入っているだろう、

彼女の持っている営業カバンには、

キティちゃんの小さい縫いぐるみが、くくられていた。

可愛い女を演じているのだろうか。

それとも、あたしから見たら、嫌らしい感じのああいいう女が、男たちには可愛いと受けるのか、あたしは知らなかったけれど、でもなんだか、癪に触った。

「みなさーん！」

あたしは声を張り上げる。

そして、紺のミニタイトのスカートの片足を、

近くにあった椅子の上に乗せた。

短いタイトスカートはめくれて、

あたしの太ももを大きくさらした。

「あたしの今日履いているパンティの色、

あたしに触らないで、当てられた人には、

リース料率、5パー下げちゃう！」

キティちゃんの縫いぐるみみたいな、

少女じみたファッションや小道具で、

間接的に男を惑わせて誘う営業が、

ライバル会社の彼女の手法なんだとしたら、

あたしのエロ営業の手法は、
かなりえげつないかもしれない。
でも、考えたら、どっちも結局同じようなもん。
だって、キティちゃんを持っている彼女だって、
あたしと年なんて変わらなくて、
そして、この営業所には男しかないのだ。

どっちが勝ったかっていえば、
あたしの大勝利だった。

結局、あたしのパンティの色を当てた営業マンに、
リースの料率は下げたのだけれど、まるきりキティの彼女を差し置
いて、

あたしにリースの案件が殺到したので、
売り上げ的には信じられない額になった。

プラス1000万。

きっと、今日の締め切りに提出する健次郎とのチームの営業成績は、
リース営業部で、トップになるのではなからうか。

そう、あたしは可愛くはないけど、
稼げる女なのだ。

って、やっぱり「稼げる」っていう修飾語も、
女という言葉に属していい気がする。
これも、あたしだけの気のせい？

会社に戻る途中、丁度ランチタイムだったし、

あたしと健次郎は、今さっきの大収穫をお祝いしようと、ちょっと高級なイタリアンレストランに入った。

そして昼間なのに、あたしはワインを飲んだ。

健次郎はオレンジジュースだった。

健次郎がトイレに立った時、

あたしはもう一杯、グラスワインを頼んだ。

そして、健次郎が帰ってくる前に、
一気飲みをした。

あたしはやっぱ、男に生まれた方が良かったんだと、
醉えない昼の酒に、

そんな事を、しみじみ思っていた。

なんか、泣きそうだった。

きっと、一人きりだったら泣いていたかもしれない。

「さよ子先輩は素敵ですよ」

ふと、声がした。

トイレから戻ってきた、健次郎だった。

「本当にそう思います」

ワインを一気飲みしたグラスをテーブルに置きながら、
あたしは大きく息を吐いて、健次郎を見る。

「本当に素敵です」

健次郎は、そんなあたしに、

もう一度言った。

その顔には分厚いレンズのメガネはなく、初めて見る、澄んだ切れ長の瞳があった。

茶目っ気も含んでいて、あたしが驚きに目を見開いていると、くるりと目を回して、

「僕、こんな事を女性に言ったのは初めてです」と、明るく言った。

あたしもそんな事を言われたのは、初めてだ。

「あんた、メガネは？」

あたしが照れ隠しのように言うと、

「最近度が合わないから、コンタクトも持っているんです。

メガネ、疲れちゃって。今、コンタクトにしたところです」

健次郎が言う。

メガネを外した健次郎を、

ああ、こういうイケメン、テレビで見たような気がする、あれは韓流のドラマだったかと、自分の中で呟きながら、あたしは、穴が開くほど見ていた。

「今夜飲みに行きませんか？僕のおごりでふと、健次郎が言う。

コンタクトの呪縛から、

まだ解き離れないあたしは、朦朧と頷きながらも、

「おごりは当たり前じゃん。ノルマクリアは、あたしのおかげなん

だし」

眩くように言いながら、あたしは健次郎を見つめ続ける。

そして、あたしは夢遊病者のように言った。

「あんた、さっきあたしの事をなんて言った？」

あたしの言葉に、健次郎は驚きながらも笑った。

あの度の厚いメガネ無しで。

「さよ子先輩は、素敵です」

あたしは、健次郎のその言葉を再び聞くと、

高級なイタリアンレストランの椅子を蹴倒して立ち上がり、
彼に抱きついた。

例え、世界中の人が全て、

自分と違う価値観で生きていて、

自分が一生懸命にしていることを、
すべて否定したとしても。

見つけた、たった一人が、

自分を素敵だと、思ってくれるなら。

「素敵な女」には「可愛い女」なんか、

その足元にも及ばないだろう。

自分と同じ背丈の男に抱きつきながら思う。

ざまあみろ。

素敵なあたしは、今まで可愛い女に怯えていたあたしに、
大威張りしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365s/>

君はス・テ・キ

2011年10月8日08時05分発行